

問8 郵送法による調査で回収率が低いとき、調査の意味がないのでしょうか。

(答) 統計解析において推定、検定などの統計的推論を行なう基礎には、標本の無作為抽出が前提になります。統計的推論ではある種の確率を計算し偶然性の程度を評価しますが、その偶然性は無作為抽出の際に生ずるものだからです。統計的推論の精密さに標本サイズ $n$ の大小が関係することは、上述の4の(答)にあるとおりです。問題は回収率の如何によらず、この $n$ に回収数をそのまま用いてよいかどうか、ということです。ただし、回収された質問票に不備のものがあれば、解析に用いられる有効回収数はその分だけ減少します。ここでいう回収数とは有効回収数を指すものとします。

さて、“もし、回答者に何らの選択も入らない、すなわち、質問内容に何ら影響されず回答を寄せてくれた”のであれば、それは再度無作為抽出がなされたようなものですから、回収されたデータは無作為抽出された標本とみることができ、有効回収数を標本サイズとして統計的推論を適用することができます。しかし、回答者の中にこの調査に特別の関心を有する者が高い比率で含まれる場合は、データに偏りが入る、すなわち、対象集団の中の一部の偏った者の回答に結果が左右されることになります。この偏りは、回収率が低い場合ほど影響が大きくなる可能性があります。偏りは偶然現象ではありませんから、確率論を用いて推論することは不可能です。はっきりいって偏りに対し統計的推論は無力ということです。その対策といえば、回収率を高める努力をする以外にありません。たとえば、再度お願いする(督促状を出す)、質問票を回答しやすいように工夫するなどです。郵送法でも有効回収率を60%程度にはしたいものです。

問9 調査数が少ない場合に適切な分析方法があるでしょうか。

(答) 調査数が少ない場合には、結果に偶然変動が大きく影響する可能性があります。その点を考慮するのが、統計的推論です。nが小さい場合は信頼区間を算定したり、仮説検定で有意性（偶然性の評価）を調べたりすべきでしょう。この場合、適切な解析方法とは結果を慎重に解釈せよ、ということです。

問10 調査方法を選択する際、どのような点を検討しておけばよいでしょうか。

(答) ここでいう”調査方法”とは実査の意味と思います。統計学の用語として実査とは調査対象から情報を収集する技法といい、面接、電話、留置、郵送、集合の5つに大別されています。如何なる実査法を採用するか、調査費用、人力、調査期間、調査の内容、正確性など考慮して決められます。それぞれの長所、短所は大抵の統計調査法に関する教科書に述べられています。

## < 調査票の作成 >

問 11 調査票作成における留意点について具体的に教えて下さい。

(答) ここでは仮説を探る実態調査については除いてお答えします。もっとも大切なのは、調査項目を絞ることです。項目が多くなるのは仮説が明確化されていないこと、関連要因について予備的検討（文献などによる）が不十分なためです。調査項目の選定ではあとの解析も考慮しておくべきで、解析に不要な項目は全て捨てた方がよいのです。ひょっとして解析に用いるかもしれない、ここで聞いておかないとあとの祭りになる、と危惧して調査項目を増やす傾向がありますが、項目が少ない方が被調査者も楽です。また、その方が解析の手間もはぶけるはずですが、今日はコンピューターで解析するため、その点はあまり考慮されないようです。そのため、問題点を十分に煮詰めないで調査に入るケースが少なくないようです。

問 12 回答形式の設定の仕方について教えて下さい。

(答) 回答形式には、2肢選択、多肢選択、複数回答、順序回答、自由回答などがあります。調査内容が2カテゴリーの場合（たとえば、性別）は2肢選択の形式しか考えられません。多カテゴリーの場合は多肢選択か、情報を減らして2肢選択にすることもあります。同じことは、数量データをいくつかの階級に分けて多肢選択にすることもあります。複数回答は少し複雑なので後に詳しく述べます。順序回答は被調査者にとり非常に回答しにくいので、できるだけ使わない方がよいでしょう。自由回答も同様ですが、意見や感想など分類し難いものを調査する場合はやむえません。ごく少なく質問票の最後におきます。自由回答を集計するには、結果を分類、コード化する必要がありますが、これには大変な労力がかかる上、分類には調査者の主観が入る可能性もあります。自由回答は集計せず、個々の回答から何かのヒントを得るぐらいに考えた方がよいと思います。

問13 ADLに関する質問票では、たとえば、“一人で入浴ができますか” という問いに対し、“1. 介助は不要、2. 部分的介助が必要、3. 全面介助が必要”、の中から選択するという回答形式がよく用いられます。この解析の際、“介助不要” 2点、“部分介助” 1点、“全面介助” 0点のように得点してよいでしょうか。また、それぞれを3点、2点、1点と得点化してもよいでしょうか。

(答) この回答形式は3つのカテゴリーのうちの1つを選択する多肢選択です。一般に、カテゴリーの選択によるデータを質的データ（カテゴリー・データ）といますが、カテゴリーが3つ以上に分類された場合は、それらの間に順序があるかどうか、が問題になります。生活動作の能力については、“介助不要” > “部分介助” > “全面介助” と並べることができるので、順序カテゴリー・データになります。

数量データは、当然、順序の情報を持つ上に距離の情報も持っています。そこで、順序カテゴリー・データは数量データと順序のないカテゴリー・データの間の中の情報をもつといえます。順序カテゴリーの本質はというと、観察対象は数量的な内容をもつがそれを測定する方法がみつからない、測定方法は考えられて極めて繁雑であり精度も悪い、主観的な判定によらざるを得ない、などが考えられます。この場合は対象をいくつかのカテゴリーに分類して、おおよそのレベルを選択するのが実際的といえます。

順序カテゴリーの背後に数量が隠れているならば、それを取り出したくなるものですが、情報量の少ない質的データをそのまま情報量の多い数量データに置き換えることは不可能であり、そのため各種の数量化法では別の情報や前提条件を追加して数量化を行います。ところが質問のケースは如何なる情報も条件も用いず、恣意的に得点化するものですから、これを疑問に思うのは当然でしょう。にもかかわらず、このような方法が広く使われるのは、得点化すれば平均や標準偏差で表わすことができ、後の統計処理が便利になるからです。また、この数量化による情報の水増しは結果にあまり影響しそうもない、と想定しているのです。統計学は実際的な学問ですから、論理的に多少おかしな方法でも利便性を優先して採用されるのです。

一般に質的データを数量化したデータには零点がなく、間隔尺度の水準といえます（体重など零点をもつ数量データは比率尺度の水準）。したがって、零点をどこに置こうと任意ですから、3点、2点、1点と得点化しても本質は同じことです。もちろん、平均は1だけ大きくなりますが標準偏差は変わりません。

問 14 調査票における質問の回答形式として複数回答のものを採用した場合、パーセントの取り方に迷うことがあります。基本的な考え方を教えて下さい。

(答) 複数回答の形式にもいくつかの型があります。複数回答形式では、○はいくつでもつけられるものと、○の数を制限するものがあります。前者は、多くの独立した二者択一式の質問を一つにまとめたものです。それぞれが”はい”または”いいえ”のいずれかで答える形になります。したがって、全てに○をつけた場合はいずれの質問にも”はい”と答えたのであり、ひとつも○をつけなかった場合はいずれも”いいえ”と答えたこととなります。この場合は、各回答ごとに○をつけた人数を対象数で割ってパーセントを表わせば、対象全体のうち、○の割合が得られます。よく見かける誤りは、○の数を合計して対象数で割るもので、そのためパーセントが 100 を越えることも起りますし、また、それを避けるため、分母に回答項目数を乗じてパーセントを出しているものがあります。これらのパーセントは如何なる意味を持つものか、解釈に困ることになるでしょう。異質なものを加えることは意味がないからです。

後者は、”3つまで”、あるいは、”3つだけ”というような制限を加えたものは、一種の順序回答形式といえます。上から3位まで選びなさい、ということですから、互いに比較して順序づけをしていることとなります。この場合もパーセントは各回答項目ごとに○の数を解析対象数で割って求めますが、それは3位以内の入ったものの割合を意味します。複数回答形式ではいずれの場合も、各回答項目ごとにパーセントを算出することになります。

問 15 順序のあるカテゴリーの多肢選択の場合、選択肢を 4 つするか、5 つにするかで結果の精密性に影響するでしょうか。

(答) 選択肢を多くすれば形式的には情報は詳しくなりますから精度は増したことになります。しかし、それは各カテゴリーの選択が明確になされることが前提です。基準が曖昧な主観的な段階づけでは額面どりの精度があるとは思えません。また、再度、同様な質問がなされたときの再現性がどこまで保証されるか、疑問な場合も少なくないようです。したがって、むやみにカテゴリー数を増やすことには考えものと思います。

問 16 フェイス・シートに盛り込むべき事項と調査票における配置について教えて下さい。

(答) フェイス・シートとは被調査者の属性に関する質問を集めたものです。フェイスは“顔”ですから、調査票の表面を意味するもので、かつてはしばしば、そのような質問事項を調査票の表面に置くのが普通でした。これは手集計の時代に、調査票を被調査者の属性、たとえば、男女別などに分類するのに便利だからでした。一部には現在でも質問項目の始めの部分にフェイス・シートを置いた調査票を見かけることがあります。

しかし、個人属性に関する質問、すなわち、性、年齢、職業、婚姻関係、居住地、所得などは、被調査者にとりにはなほだ不愉快な質問となる場合が少なくありません。調査目的と直接関係ないように受け取られるこれらの質問を、最初に並べることは調査に対し協力する気持ちをそぐ結果になりかねません。そこで、個人属性に関する質問は可能な限り減らすこと、また、その位置も調査票の最後に置くのが原則となっています。被調査者の協力が得られないと、回収率が低下するとともに、調査内容の信頼性も保証できないことになるからです。

< 解析 >

問 17 統計的推論の形式には、区間推定と仮説検定がありますが、これをどのように使い分けるのですか。

(答) 統計的推論は、母集団からの無作為抽出によって得られた標本データに基づいて、母集団の特性を確率的に推論するもので、これには区間推定と仮説検定の方法があります。まず、簡単な実例を基に、区間推定と仮説検定について説明します。いま、50 歳代の婦人 120 人について集団健診を実施し、肥満度を調べたとします。ここで健診対象者は母集団（たとえば、地域人口集団）から標本とみなし、肥満者の割合に関する統計的推論を試みることにします。BMI の値が 24.2 以上を過体重、26.4 以上を肥満とし、ある調査では 50 歳代女性では過体重以上の者の割合は 35.2%となっています。さて、上記の対象者に過体重以上の者が 51 人含まれていたとします。割合は、 $51/120$  で 42.5%になります。表の①は、割合の区間推定の式にデータを入れて算定したもので、母集団の過体重割合は信頼度 95%で、33.5%から 51.4%の間にあると推定されました。

次に、②は帰無仮説を「母集団の過体重割合は全国並みの 35.2%」とおいて検定したものです。割合の検定の式に各値をいれて算定した結果、検定規準の値は 1.67 となって有意水準 5%の両側検定の棄却域に入らず、非有意となりました。この両者の式をみると、標準誤差の算定部分（平方根のところ）に①では観察値の 42.5%が入り、②では仮説値の 35.2%が入るので、両者の値は多少異なりますが、本質的な差異にはなりません。推定と検定は推論の形式が異なるだけで、確率計算は同じようなものなのです。実際、①の信頼区間の中に仮説値である 35.2%が含まれることから、上記仮説を非有意と判定する方法もよく行なわれます。一つの結果を推定にも、検定にも用いているのです。



では、推定と検定の違いはというと、前者は区間という数量的表現で推論しているのに対し、後者は有意あるいは非有意という質的な推論形式になっているところです。質的な推論より量的な推論である区間推定の方が情報としては詳しいわけですが、一方、質的な推論の方がはっきりするように誤解する人も少なくないようです。さて、データが少ないと信頼区間の幅が広くなり、実際問題として役に立たなくなります。そのときは質的な推論である検定でがまんするわけです。一般的に言えば、標本サイズが大きい調査結果には推定、小標本の実験には検定が向いているといえます。

①割合の区間推定

$$0.425 \pm 1.96 \sqrt{(0.425 \times (1-0.425))/120)}$$

$$= 0.425 \pm 0.088$$

95%信頼区間 33.5%～51.4%

②割合の検定

$$| 0.425 - 0.352 | = 0.073$$

$$\frac{0.073}{\sqrt{(0.352 \times (1-0.352))/120)} = \frac{0.073}{0.0436} = 1.67 < 1.96$$

有意水準 5% で非有意

問 18 クロス表についてパーセントを取る場合、縦に取るか、横に取るか迷うことがあります。基本的な考え方について教えてください。

(答) クロス表とは何か、クロス表を作るねらいは何か、この2点を明確にしておくことが大切です。クロス表とはクロス集計により作成された表をいいます。クロス集計は2つの項目の結果を組み合わせて集計することです。ある対象集団に対し質問票調査を実施したとして、調査票にある2つの質問、たとえば、質問1「現在、高血圧で治療を受けていますか」と、質問2「両親や兄弟に高血圧症の方はいますか」のクロス集計を考えてみます。質問はいずれも、“はい”、あるいは、“いいえ”で回答する形式です。表1はその結果を示した仮想例で、この形の表を2×2クロス表と呼びます。例では、被調査者200人の結果を2つの質問項目の“はい”、“いいえ”による4通りの組合せについてクロス集計し、次に縦横に合計を求め、“高血圧の治療している者”50人、“その他の者”150人が得られています。

これとは別に、高血圧治療者50人と対照者150人を選び、家族歴の質問2を行なった場合（これを患者対照観察と呼ぶ）を考えてみますと、同じような結果表が作られます。しかし、この場合はクロス集計ではないので、クロス表と呼ばない方がよいでしょう。

さて、患者対照観察のように対象を選択した場合には、比率の分母に対象の大きさ（すなわち、患者数、対照数）以外のものを採用することは考えられませんが、クロス表ではパーセントを縦にも横にも取ることが可能です。そのとき、2つの項目間に因果関係が想定される場合は、原因についてパーセントを取るのが適切です。クロス表を作る第一のねらいは因果関係を調べることにあります。例では、家族歴が高血圧の原因になりうる想定されるので、表1のように縦にパーセントを取り、家族歴の有無の間で高血圧割合を比較するのがよいでしょう。

つぎに、因果関係が明確でない例として、質問2を「日頃、食塩を控えるように注意していますか」に置き換えてみます。この場合、食塩摂取を注意していることが高血圧の予防になっているのか、血圧が高いため食塩を控えているのか、因果に両方向がありえます。これは断面調査の限界です。この場合はクロス表を作ること自体、意味がないこととなります。また、項目間の関連性がもともと非因果的な場合もあります。たとえば、「毎日、運動していますか」と「食べ過ぎに注意していますか」という質問項目の間に因果関係は考えられません。両者の関連性は共通の要因（肥満対策の意欲など）から生ずるものとみられます。このとき縦横どちらにもパーセントを取ることができますが、この種のクロス表もあまり重要とはいえないものです。

表1 高血圧と家族歴のクロス表（仮想例）

		家族歴		計
		あり	なし	
高血圧 の 治療	あり	30(37.5)	20(16.7)	50
	なし	50(62.5)	100(83.3)	150
計		80(100)	120(100)	200

問 19 質問票では3区分の多肢選択回答形式のデータを解析する際、まとめた方が明確な結果が得られると思い2区分にしましたが、このようなことは許されるでしょうか。

(答) 表1の具体例で説明しましょう。これは運動がコレステロール値の改善に有効かどうかを調べたものです。改善の度合を3段階の区分(カテゴリーという)で示していますが、これを表2のように「やや改善」と「改善せず」を併合、あるいは、表3のように「改善」と「やや改善」を併合して2×2クロス表とし、関連性の検定などをしてもよいかという質問です。

ここには2つの問題が含まれています。一つはカテゴリー併合の是非、もう一つはその場合に表2と表3のいずれの併合を採用すべきかということことです。

まず、カテゴリーの併合についてですが、情報量という観点からは3区分の方が2区分より詳しいわけであえてまとめる理由もないのですが、一方、結果を読みとる際は、2区分の方が分かり易いこともあります。解析とは基本的に不要な情報を捨てることですから、2区分の情報で十分と思うならば併合してもよいといえます。また、2×2クロス表の関連性検定ならできるが、表1のような2×3クロス表の検定についてはよく分からないので併合したいという人もあります。この例のように、効果が順序データとして観察されている場合、通常、マン・ホイットニーの順位和検定を用いて、「毎日運動」群と「時々運動」群の改善効果の差を検定しますが、前述のようにカテゴリーを併合して2×2クロス表とし、いわゆる、カイ二乗検定を適用することに問題はありません。

さて、第2の問題点ですが、得られた結果について、様々な工夫(カテゴリーの併合もその一つ)をこらし解析することはいうまでもなく大切なことです。この例でいえば、運動の効果を分かりやすく示すためにカテゴリー併合することです。

表2は、はっきりした改善のみを捉える併合であり、表4の方は僅かな改善にも注意を払った併合といえますが、どちらを採用するかは研究のねらい如何によるわけです。ところがしばしばみられるのは、両方の併合を試み検定結果が有意になったものを採用する、すなわち、有意になるように併合するというものです。この例では表2は関連性の検定で有意になり、表3の方は非有意になりました。そこで、表2の結果表のみを提示すると

というのは適切ではありません。結果の得られる前にカテゴリー併合の方針が定めておくべきですし、結果が得られた後でも探索的に併合を試みることはよいでしょうが、結果をみて有意になるように併合することは、正しい確率計算になりません。統計学では一般に、結果が得られてから操作を加え、あたかも事前に操作してあったかのように解析して結果を解釈することを”後知恵”あるいは”後付け解析”と呼んで戒めています。

表1 運動のコレステロール値への効果

	コレステロール値			計
	改善	やや改善	改善せず	
毎日運動	15	28	6	49
時々運動	5	29	13	47

表2

	コレステロール値		計
	改善	その他	
毎日運動	15(31%)	34	49(100)
時々運動	5(11%)	42	47(100)

$\chi^2 = 4.65$  (5%有意)

表3

	コレステロール値		計
	改善あり	なし	
毎日運動	43(88%)	6	49(100)
時々運動	34(72%)	13	47(100)

$\chi^2 = 2.69$  (非有意)

問 20 回答結果について%をとるときの分母の扱い方について教えてください。

(答) パーセントとは比の値に 100 を乗じたものをいいます。100 を乗ずるか  
どうかは比を見やすくするためで、本質的なことではありません。場合によ  
っては 1000 を乗ずることもあれば、10 万を乗ずることもあります。問  
題は何のために比で表わすのか、そのときの分母、分子はどのように考え  
るのか、ということです。比のねらいは分子から分母の大きさ影響を除く  
ためです。たとえば、死亡率は分子である死亡数から人口規模を揃えてそ  
の影響を除いて死亡の度合を比べるものです。したがって、何を分母にす  
るかということ、その影響を除きたいものを採用する、ということになりま  
す。

比も分子、分母の性格により様々なものがありますが、ここでは断面調  
査の結果の解析において主として算定される比、“割合”を取り上げるこ  
とにします。割合とは、対象全体に占める特定の性質をもつものの比で、  
分母は対象数、分子は特定のものの数です。そこで、分母を有効回答数と  
するか、不明などを除くべきか、は対象をどのように考えるかによるとい  
えます。形式的にどちらがよいということにはなりません。“不明”の数  
が著しく多いとき（おそらく設問に難点があるため）、これを無視して分  
母から除くのは適切でないでしょう。一方、“不明”がごくわずかであれ  
ば、除いても除かなくても結果は大差ないでしょうからあまり問題になり  
ません。

問21 予想に反する結果、異常と思われる値が得られたとき、どのように考えて対応すればよいのでしょうか。

(答) 一般論としてお答えすれば、確証的研究において著しく予想に反する結果が得られたら、おそらく調査のどこかに欠陥があったと考えるのが普通です。立てた仮説には十分な根拠（他の研究など様々な情報に基づいて科学的に推論したはずのものだから）があるはずですから、それから著しくはずれた結果が得られることは通常考え難いのです。調査の欠陥では、調査対象の特殊性、回収率の低さ、質問文の不適切などに基づくバイアスの混入がもっとも重大です。一方、探索的研究ならば、調査の欠陥と考える以外に、新しい仮説の発見という期待もありますから、予想に反した結果は大事にしなければなりません。

< 図表の書き方 >

問 22 数値で表わすものと図表で表わすものをどう使い分けたらよいでしょうか。

(答) 統計図表の利点は統計値のもつ情報が一目で分かることで、数値情報の正確さを多少犠牲にしても明確性を優先するものです。したがって、どうしても正確な数値を示したい(たとえば、対象集団の総数など、行政上の意味があるもの)場合は統計数値が重要になります。一方、統計値のおおよその比較や傾向は図表現の方が優れています。調査研究などで、とくに重要な結果は目につき易いように図表現を採用すべきでしょう。この場合も何を意味するのか、頭をひねるような図表現は適切といえません。もう一点大切なことは、錯覚を起こさせないということです。情報を誤りなく伝えることは、統計の基本なのです。



問 23 棒図表や線図表などの統計図表を画く際に、目盛りにカットを入れることがあります。その方式に一定のきまりがあるのですか。

(答) 棒図表の目盛りカットについて説明しましょう。棒図表は統計値を棒の高さで表現するものです。そのためには棒は基線と呼ばれる横軸から立てねばなりません。この基線には0の目盛りがつけられますので、零線とも呼ばれます。

棒図表で目盛りにカットを入れて、棒の高さの差を拡大し、目を引く図を画くことはしばしば行なわれます。しかし、いくら関心を集めたいといっても、錯覚を起こさせるような図は絶対に避けなければいけません。棒図表においてよく見かけるのは、零線がない、すなわち、横軸の目盛りが0でないもの、あるいは、縦軸の目盛りのみにカットを入れ、棒にカットが入っていないものです。見る方は棒図表は基線上にあると思っていますから、いずれも錯覚を起こす可能性があります。目盛りを見ない方が悪い、などといったはいけません。統計図表は他人に情報を伝えるためのものです。

次に線図表について説明します。線図表は隣合った点どうしを線で結び、その全体の傾向の形を読みとるものです。その点には並び順（ここでは年次順）があってはじめて、全体の傾向パターンに意味が生じます。一方、個々の点の高さ（縦座標）の方は、さほど重視しません。図は重要な情報が目立つように画くものです。ここでは縦軸の目盛りをカットしても傾向パターンは変わらないので、図のように目盛りのみのカットで十分なのです。

## < 調査の信頼性と妥当性 >

問 24 調査の信頼性と妥当性とは何を指すのですか。どのような要件が満たされていけばよいのですか。

(答) 信頼性とは誤差が少ないこと、すなわち、再現性があることです。すでに述べたように、誤差には標本誤差と非標本誤差があり、標本誤差は信頼区間などで保証することができます。一方、非標本誤差は回収率の低さ、虚偽の回答、集計ミスなどで、確率論を用いてこれを推定することはできません。しかもこの誤差はバイアスになる可能性が強く、その対応はなかなか難しいものです。調査の信頼性は主として非標本誤差によって決まると考えればよいと思います。

妥当性は調査のねらいどうりのものになっているか、ということです。それには調査目的が明かでなければなりません。そして、目的にそって対象集団や調査項目が選択されているかどうか問題になります。解析の妥当性も問題になります。たとえば、年齢調整死亡率で集団の公衆衛生水準をくらべるべきを、粗死亡率を用いるなどは妥当性を欠くものといえますが、これはやり直しがききますから致命的なものにはなりません。

## 2. 保健婦の保健計画・施策化に関する指導方法の開発・指針作成 — リーダー保健婦への面接等調査の分析から —

分担研究者      村山正子      (富山医科薬科大学)

研究協力者      丸山美知子 (国立公衆衛生院)

山崎京子      (神奈川県立衛生短期大学)

北尾玲子      (神奈川県国民健康保険連合会)

大野昌美      (富山医科薬科大学)

## 保健婦の保健計画・施策化に関する指導方法の開発・指針作成

ーリーダー保健婦への面接等調査の分析からー

分担研究者

村山正子

富山医科薬科大学

### 研究要旨

保健婦の実践活動の質を高め、効果的な保健サービスを提供する上で基本をなす「保健計画・施策化」能力発揮の実際を保健所及び市町村リーダー保健婦16人から聴取した。その結果、各種保健計画への関与経験が豊富であること、地域ニーズを新規保健事業として形作っていく「事業化」の経験を有していること、事業化の要となって発案者・指揮者・指導者・調整者として機能していることが明らかになった。また、スタッフ保健婦への指導は、体験を重視し、自らモデルを示しながらOJTとして意図的に行われていることが明らかになった。しかし、保健婦自身の専門職・行政職として向上意欲の不足などが施策化能力の向上を阻む要因であることも明らかにされた。そこで、リーダー保健婦の役割遂行やスタッフ保健婦の意識改革に役立つ内容を主体とした指針が必要と考えられ、調査票の記述から抽出した「事業化プロセス」と「指導方法」に関する項目の内容を精査し一般化できる項目にまとめ、実際に応用できる指導指針案を作成した。

### A 研究目的

前年度までの研究において、「保健計画・施策化」機能を発揮するために必要な能力を明らかにし、各々の能力に関する自己評価及び妥当性について全国の保健婦を対象に調査し、その結果からこれらの能力を育成するための研修プログラム案を作成した。

また、「保健計画・施策化」機能の資質向上に関して、全国的に研修機会が少ないこと、現任教育等に職場内教育が体系化されていないこと、実践的な指導方法が示されていないことが明らかになった。

保健婦の実践活動の質を高め、効果的な保健サービスを提供する上で基本をなすこれらの能力を育成することは重要であり、実践的な指導方法の開発・指導指針の作成は必要である。特に職場内教育の果たす役

割が重要である。

そこで今回は「保健計画・施策化」の資質向上を図るため、実践的な指導方法を開発し、指導指針(案)を作成することを目的とした。

### B 研究方法

#### 1. 保健計画・施策化に関わっている保健婦へのインタビュー等調査

調査対象：保健所または市町村のリーダー保健婦20人に対して調査の趣旨・調査内容について説明し協力の得られた16人

調査方法：①平成8年度研究における計画化プロセスに基づいて、「事業化プロセス」のポイントとなる調査項目を選定、自由記載方式の調査票を作成した。

②調査票を対象者に送付し、自身で回答を記述してもらった。記述内容の不明部分・